日本災害看護学会第26回年次大会
2024.9.1 茨木市役所

修正版プログラムによる コミュニティ形成を目指した 「まちの減災ナース育成研修」の実装評価

―受講者のアンケート調査より―

網木政江[1)]，牛尾裕子[2)]，斎藤美矢子[2)]，村上祐里香[2)]，榊原弘之[3)]

1）山口大学地域レジリエンス研究センター
2）山口大学大学院医学系研究科
3）山口大学大学院創成科学研究科

Yamaguchi University

山口大学地域レジリエンス研究センター
防災・減災グループ
Disaster Prevention and Mitigation Group

日本災害看護学会第26回年次大会
COI開示

●演題名　　：修正版プログラムによるコミュニティの形成を目指した
「まちの減災ナース育成研修」の実装評価―受講者のアンケート調査より―

●発表者氏名：網木政江[1)]，牛尾裕子[2)]，斎藤美矢子[3)]，村上祐里香[4)]，榊原弘之[5)]

●所属・役職　：　1) 山口大学地域レジリンス研究センター・学術研究員
2) 山口大学大学院 医学系研究科・教授
3) 同大学院 同研究科・講師
4) 同大学院 同研究科・助教
5) 同大学院 創成科学研究科・教授

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある
企業・組織および団体等はありません。

はじめに

1995年　阪神淡路大震災を契機に，防災福祉コミュニティづくりが始まる

2011年　東日本大震災

2013年　災害対策基本法改正
市町村の一定の地区内の住民らによる自発的な防災活動に関する
「地区防災計画制度」の創設（2014年4月1日施行）

平時も災害時も機能する防災福祉コミュニティの形成

↑

**【実装戦略】小学校区を単位とする地区防災関係住民との協働による
「まちの減災ナース育成研修」**

地区防災関係住民との協働による

2022年「A市 まちの減災ナース育成研修」概要と課題

● 2022年7月～10月
A市3地区の看護職14名を対象に実施

● ねらい
1.減災活動に必要となる基礎知識の習得
2.課題解決能力の育成
3.受講者同士および地区防災関係住民との関係作り

● 結果
・研修のねらいに即した成果を得た.
・防災福祉コミュニティ作りにつながる地区防災計画に関する理解不足が考えられた.

●研修プログラム

回	形態	内容
1 (半日)	オンライン講義	「まちの減災ナース」とその役割 災害医療・看護の基礎知識
2 (半日)	講義	A市の地域特性と防災の取り組み 水害時における高齢者の避難行動支援
3 (1日)	GW	「私たちが生活する地区の防災・減災活動の現状と課題」
	講義	A市における要配慮者の対応と課題
	ミニシンポジウム	テーマ「地区の防災・減災への取り組み」 1）自主防災会の立場から 2）地域包括支援センターの立場から 3）地域・保健福祉支援チームの立場から
4 (1日)	講義	新型コロナウィルス等の感染症に配慮した避難所運営 災害ボランティアセンターの運営
	GW	「地区の防災・減災に関する課題とまちの減災ナースとしての今後の取組み」

研究目的

　修正版プログラムを用いて地区防災関係住民との協働による「まちの減災ナース育成研修」を実施し，受講者アンケートに基づき研修を評価し，他地区へ普及できる研修プログラム開発への示唆を得る.

研究方法

■まちの減災ナース育成研修の企画・実施

【対象】 A市の隣接する2地区に在住または在勤し、災害看護に関心があり、地区で減災活動や災害支援活動に取り組みたいと考えている看護職.

【実施時期，回数，形態】 2023年10月～12月，3回コース，対面

■研修受講者への無記名自記式アンケート調査

【対象】 受講者12名（1名途中辞退）

【方法】 各回研修終了後に会場で実施し、会場出口に設置したボックスにて回収.

【内容】
① 基本属性
② 受講動機
③ 研修内容の理解度・満足度
④ 事前課題の難しさ
⑤ 仲間や関係住民との関係構築
⑥ まちの減災ナースとしての今後の取組み
⑦ 研修での学び・感想

【分析】 記述統計と自由記載内容は質的分析を行い，学習到達度と研修企画・実施の視点から、2022年に別地区で行った研修と比較し評価

倫理的配慮

山口大学大学院医学系研究科保健学専攻生命科学・医学系研究倫理審査委員会の承認（759-1）を得て実施した.

対象者には，文書を用い，研究の目的，方法，個人の自由意思に基づく同意，協力しない場合も一切の不利益を被らないこと，無記名の調査であり，個人が特定されないこと等について説明し，回答内容の研究データ利用について同意を得たデータのみ使用した.

2023年　A市　まちの減災ナース育成研修

【ねらい】 減災活動に必要となる基礎知識の習得、課題解決能力の育成、受講者同士および地区防災関係住民との関係作り

【研修目標】 まちの減災ナースの活動および防災福祉コミュニティづくりの基盤となる基礎知識をふまえ，地域特性と減災に関する課題を明確にし，まちの減災ナースとしての活動の展望を述べることができる.

研修を通して，受講者および地区防災関係住民と顔の見える関係作りができる.

【到達目標】

1. まちの減災ナースの役割について理解できる.
2. まちの減災ナースの活動に必要となる基礎知識について理解できる.
3. 居住または勤務地区の特性を明確にできる.
4. 居住または勤務地区の防災・減災に関する課題を挙げることができる.
5. 研修終了後の活動の展望を述べることができる.
6. 受講者同士の仲間作り，地区防災関係住民と顔の見える関係作りができる.

修正版プログラム

●事前学習①（計100分の動画視聴）
・「災害看護の基礎知識」
・「知っておきたい法制度」
・「災害医療」
・「まちの減災ナースとその役割」
・「**地区防災計画制度と防災福祉コミュニティ**」

●事前学習②
住民ら主体の地区防災計画作成やその計画に基づいた防災・減災活動を行っている事例調べ

●事前学習③
地区防災関係住民に防災・減災対策の現状等についてインタビューし，地区特性，防災・減災対策の現状と課題をまとめる.

回	形態	内容	講師
1 (1日)	講義	A市の地域特性と防災の取り組み ハザードマップの活用 水害時における高齢者の避難行動支援 A市における要配慮者の対応と課題	市防災危機管理課 工学部教員 〃 市地域福祉課
2 (1日)	GW ミニシンポジウム	**地域コミュニティ主体の防災・減災活動** テーマ「地区の防災・減災への取り組み」 1）自主防災会の立場から（2地区） 2）教育の立場から 3）社会福祉施設の立場から 4）地域包括支援センターの立場から	保健学科教員 自主防災会会長 小学校校長 施設管理者 包括センター長
3 (1日)	講義 GW	避難所運営と避難者の健康管理の仕組み **地区の防災福祉コミュニティづくりを目指して**～地区の防災・減災に関する課題と　まちの減災ナースとしての今後の取組み	市地域福祉課 保健学科教員 まちの減災ナース

結果

受講者数12名、アンケート平均回収率　96.9%

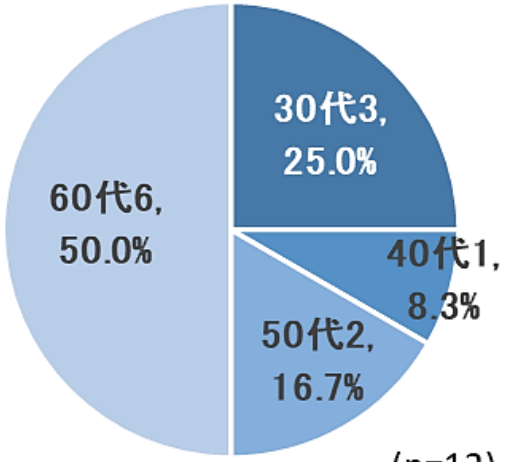
■ 受講者の背景

【地区】 B地区：5名，C地区：2名，BC近隣地区：5名

【職種】 看護師11名，准看護師1名

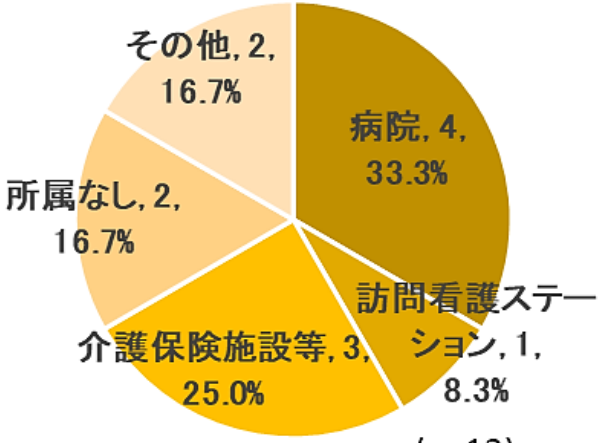
【看護職経験年数】 20年以上 4名，10～20年未満 3名，10年未満4名，無回答1名

【災害看護研修の受講経験者】 なし　　【災害支援活動の経験者】　なし



(n=12)

年代

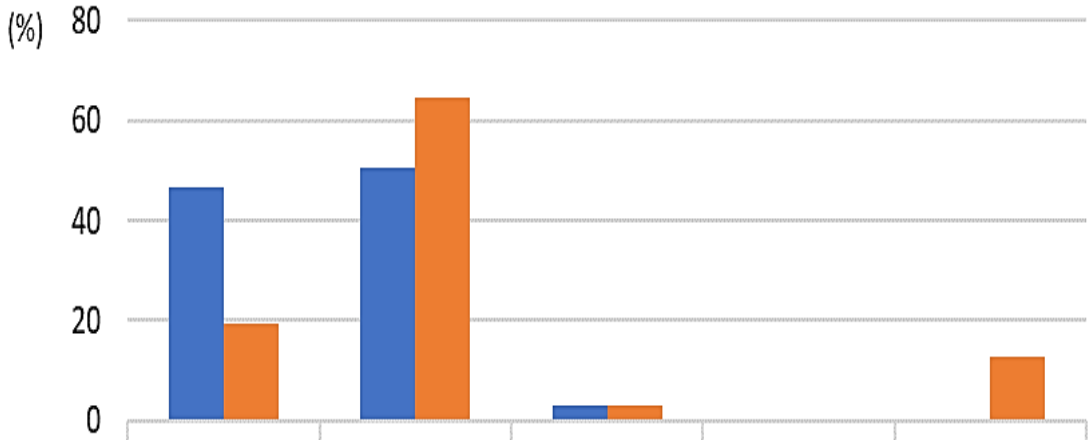


(n=12)

所属施設

受講動機（複数回答）　(n=11)

図1　受講者の背景

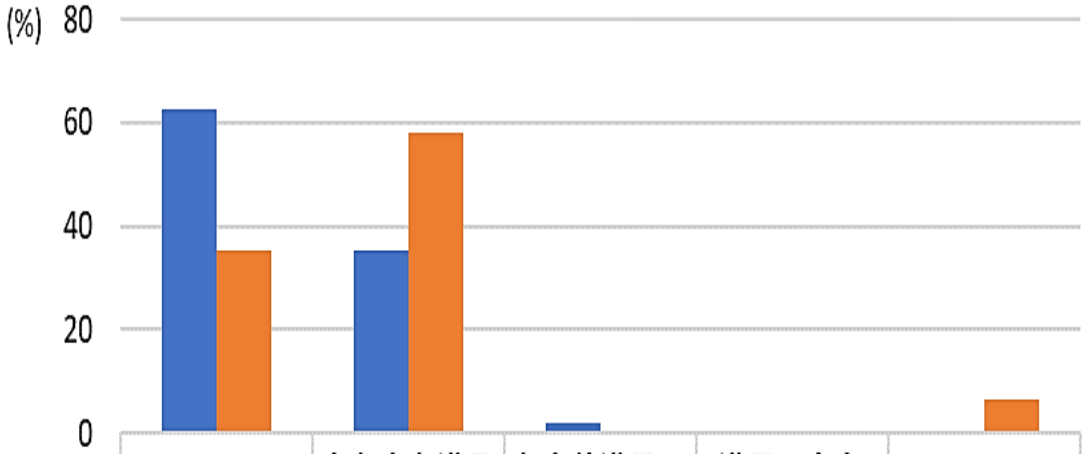


97.1%

	理解できた	だいたい理解できた	あまり理解できなかった	理解できなかった	無回答
2022年度(n=12)	46.6	50.5	2.9	0	0
2023年度(n=10)	19.4	64.5	3.2	0	12.9

83.9%

図2 研修内容の理解度



97.9%

	満足できた	まあまあ満足できた	あまり満足できなかった	満足できなかった	無回答
2022年度(n=12)	62.5	35.4	2.1	0	0
2023年度(n=10)	35.5	58.1	0	0	6.5

93.6%

図3 研修の満足度

地区防災計画に関する学習

●事前学習②

地域住民らが主体となって地区防災計画の作成やその計画に基づいた防災・減災活動を行っている事例調べ

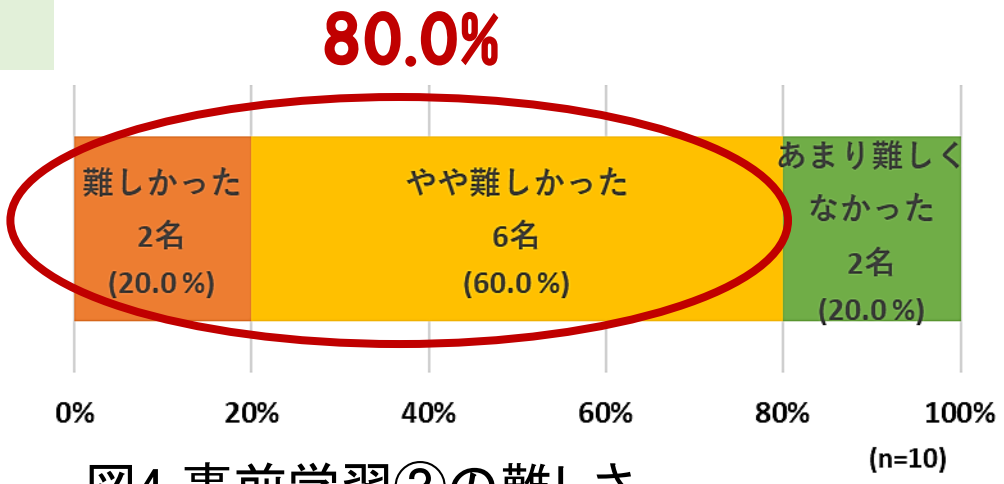


図4 事前学習②の難しさ

●グループ学習での学び

カテゴリー(コード数)	代表コード
地域特性に応じた防災対策の必要性と具体的取組み(5)	・地域の特性・特徴をふまえ，防災対策をすることが大切であることを学んだ．他地域の防災対策を知ることで，新しい視点で考えることができた． ・各地域の特性を考慮し，防災・減災の観点で平時にどんな活動をしているのかを知ることができた． ・取り入れて行きたい取り組みを，その地域の特性に沿って考えていくことも大事だと思った．
日頃からの地域の人の繋がりの重要性(2)	・日頃の地域でのつながり，日常の中での見守りの重要性 ・災害時に関わる団体，施設，人物との顔合わせが重要であると学べた．

研修での学び　（自由記述）

24コード抽出、6カテゴリーに分類

カテゴリー(コード数)	代表コード
災害看護の基礎知識(4)	・減災ナースの役割、近年の災害、防災を講義で学ぶことができた. ・CSCATTTを事前学習で初めて知った. ・避難所を開設した際のシステム（感染対策など）の詳細を学べた.
ハザードマップの見方と避難等の活用の仕方(5)	・居住している場所がどんな被害の可能性がある所なのか知れた. ・自分の生活している地域の危険度を把握することはわかっていたが，避難途中の経路についても理解しておく必要があることは目からうろこであった.
要配慮者の避難計画と支援(2)	・避難計画（要援護者避難支援プラン），避難支援制度等，具体的に理解できた. ・施設での避難計画や支援について学べた.
地域特性(4)	・住んでいる地域の強み・弱みを認識することができた. ・自分が生活している場所の特性を知ることができ，自分が取るべき行動を明確にできた.
各地区・各立場の防災への取り組みと課題(6)	・地区の自主防災会，教育現場，社会福祉施設，地域包括支援センターの取り組みや課題を知ることができた. ・自主防災会の取り組みや，減災ナースに期待すること，今後の課題について学べた.
地域の人とのつながりと共助の大切さ(3)	・地域の人とのつながり，共助の大切さ，地域の人との協働，地域の防災力をアップさせることなど学びが多かった. ・地域とのつながり，近所との日頃からのつながりの大切さを痛感した.

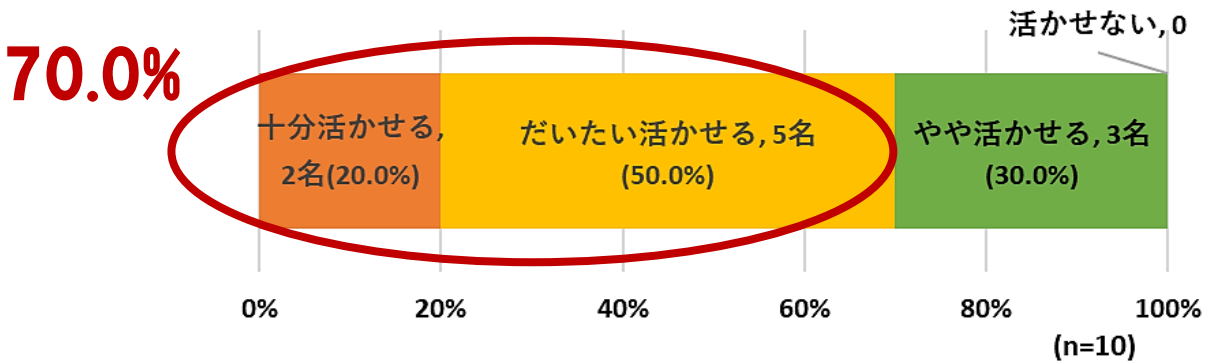


図5 研修での学びを減災活動に活かせるか

●まちの減災ナースとしての今後の取組み（自由記述）

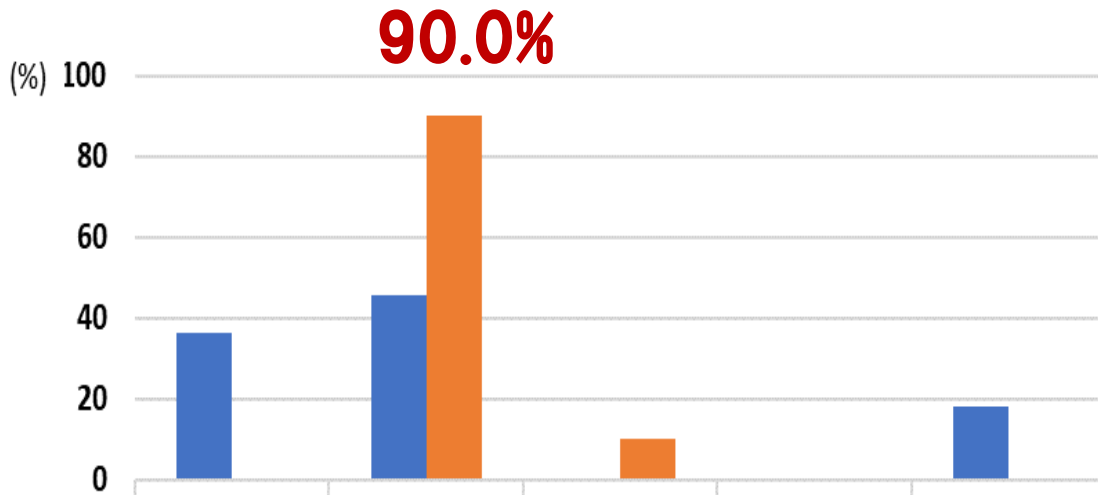
2022 （n=11）

- 自主防災組織と繋がりをもち活動に参加させてもらう(4)
- 地域活動に参加し地域住民と顔見知りになる(5)
- 防災訓練に参加する(2)
- 地域住民の防災意識を高められるよう働きかける(2)
- 仕事の中でも減災のために地域の方にできることを考える(2)
- 避難所開設時に出向き現状を知る(1)
- 「まちの減災ナース」の立上げや活動について検討する(4)

2023 （n=8）

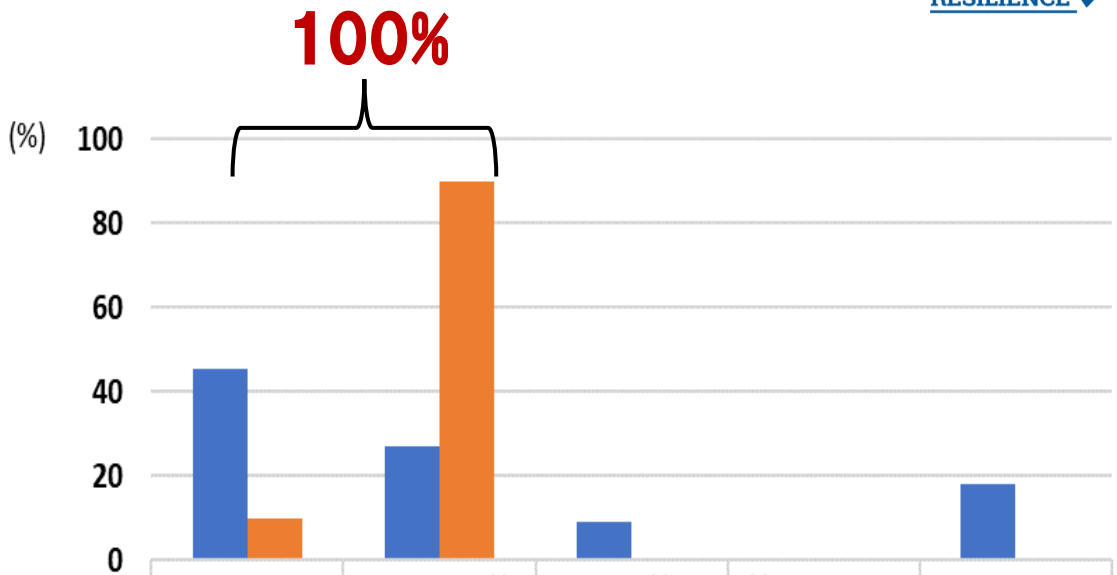
- 自主防災会に入れてもらう(3)
- 地域のイベントに参加し，繋がりを作る(2)
- 近所の人や地区コミュニティ関係者への声かけ，顔合わせから始める(1)
- 自治会内で情報共有，防災に関する周知をする(2)
- 業務の中での取り組み(2)
- 具体的にはない(2)

（　）はコード数



	そう思う	まあまあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	無回答
2022年度(n=11)	36.4	45.5	0	0	18.2
2023年度(n=10)	0	90.0	10.0	0	0

図6 減災ナースとして地域で活動していく動機が高まったか



	築けた	まあまあ築けた	あまり築けなかった	築けなかった	無回答
2022年度(n=11)	45.5	27.3	9.1	0	18.2
2023年度(n=10)	10.0	90.0	0	0	0

図7 今後につながる仲間作りや関係者との顔の見える関係作りができたか

考察

A. 減災活動に必要となる基礎知識の習得

【到達目標】 1　まちの減災ナースの役割について理解できる.
2. まちの減災ナースの活動に必要となる基礎知識について理解できる.

- 基礎知識は，自己評価では概ね理解できていたが，理解度は2022年よりやや低く、「知る」学びとなっていた.

＜浅い学びの要因＞ ・災害看護の初学者のみという受講者の背景
・グループ学習が効果的に行えていなかった可能性
—事前学習課題自体の理解不足
—検索学習が不慣れで，事前学習ができていない.
—地区混合グループがあり，話し合いが難しかった.

- 地区防災計画の内容を強化したことによる一定の成果はあった.

★ 受講者の背景に応じたプログラム調整
（研修受講・支援経験等の事前把握，学んだことを振り返る時間の考慮等）
★ 学習を効果的に行えるための配慮とサポート

B. 課題解決能力の育成

【到達目標】 3. 地区の特性を明確にできる.
4. 地区の防災・減災に関する課題を挙げることができる.
5. 研修終了後の減災活動の展望を述べることができる.

- 地区の災害リスク，強み・弱み，防災・減災に関する課題について「学べた」という記載はあったが，具体的な記述はなかった.
- グループ学習では，地区特性や防災・減災の課題を確認した上で今後の活動について発表できていた.

- 減災活動の展望については，活動継続のための団結の意向や，専門性を生かした活動、課題解決に向けた主体的な活動の記述がなく，減災ナースの活動の具体的なイメージ化が難しかったと推測された.

★ 地域の課題解決に向けて実践しているまちの減災ナースの講義を入れるなどして，活動を具体的にイメージし，研修後の実践に結び付ける工夫が必要.

C. 受講者同士および地区防災関係住民との関係作り

【到達目標】6. 受講者同士の仲間作り、地区防災関係住民と顔の見える関係作りができる.

- 地区防災関係住民へのインタビュー課題，ミニシンポジウムを通じた交流や意見交換，グループでの共同学習は，仲間や地区防災関係住民との関係構築に有効であり，受講者のコミュニティ参加の意向に結びつくことが確認できた.

- 対面で行った効果はあったが，グループ学習を通じた仲間同士の団結の意向には繋がらず，地区防災関係住民から協働の声かけが少なかったことも影響したと考えられた.

★団結力を高めるグループワーク運営の工夫，地区組織の特徴に応じたプログラムの調整が必要.

結論

1. 修正版プログラムによる学びの一定の成果はあったが，研修の理解度は2022年に比べやや低く，「知る」学びとなっていた.
2. 研修内容は満足できていたが，まちの減災ナースの活動の具体的なイメージ化ができず，グループ学習を通じた団結には至らなかった.
3. 地域・地区の理解，仲間や地区防災関係住民との関係構築に，事前課題（地区防災関係住民へのインタビュー），ミニシンポジウム，グループワークを通じた共同学習は有効であった.
4. 他地区への普及に向け，受講者の背景の違い・地区組織の特徴に応じたプログラムの調整，団結力を高めるグループワーク運営の工夫が課題である.

ご清聴いただき、
ありがとうございました。

本研究は，公益財団法人 鹿島学術振興財団特定テーマ
研究助成金の助成を受けて実施しました.